資 料

街づくりと景観照明[†]

花 輪 恒*

広島市の「観光ライトアップ計画」に参画するようになって3年経つ。その間、様々な実験を体験し、数多くのデータを得ることができた。

この広島市観光ライトアップ計画は、文字どおりの「観光」だけを対象とした計画ではなく、市中心地区の夜間景観計画としての内容をもつ。市の観光課が事業主体であったことから、観光ライトアップという名称をつけているにすぎず、本来なら企画調整や土木・公園等の部局が推進する事業であるのかも知れない。

こうしたある地域全体を対象として、計画的、総合的に夜間景観を作りだそうという試みは、これまで、博覧会を除いてはなかなかお目にかかれなかった。全国でも2～3の都市に例をみるぐらいである。その計画に参画して思うことは、地方都市の街の夜景の貧しさであった。しかし、一方で、その地ならではの、きらりと光る夜景があることは救いであった。手元の数百・数千枚の写真の多くは、何の変哲もない夜景であるが、こと水のある夜景に関しては、広島らしさや広島独自の風景を感じさせるものである。また、市域を取り巻く東西南北の山々は夜のランドマークを形成する上で十分な資産である。にもかかわらず、これら、海・山・川の自然の景観が生かされていないのは残念であり、少し手を加えれば素晴らしい夜景を創出できる環境にありながら、それを眺める場所も無い。中国地域の中核的都市、あるいは人口100万人の政令指定都市の夜景としてはやはり寂しいと思った次第である。

街づくりからの発想

新しい夜間環境の創造は、観光をひとつの側面としながらも、都市の特性を顕在化させ、歴史・文化の継承や日常の市民生活の場の可能性を拡大、ハレやケの演出により、さらに多様なシティライフをつくり出す。言い換えれば、街の夜間環境を総合的に検討することは、都市づくりそのものを、照明の観点から行うことであると言える。

広島市で行った基本計画を参考にしてみよう。「観光ライトアップ計画」では、計画の主な軸を次の6つの柱とし

ている。

①広島顔をつくる〔都市拠点照明〕

都市の玄関口となる駅前や空港、港等の都市拠点を照明により演出する。

②わかりやすい街をつくる〔都市軸照明〕

道路や交通施設等の照明計画により、都市構造を顕在化させ、安心して歩ける街をつくる。

③シンボルをつくる〔シンボル照明〕

都市独自の建築物や自然、ランドマーク等の特性を顕在化させ、個性的な夜景をつくり出す。

④親しみのある美しい夜間環境をつくる〔点景照明〕

身近な夜間点景をあちこちに形成、夜間の都市景観を魅力的で美しく親しみのあるものとする。

⑤楽しい光による個性的な風景をつくる〔修景照明〕

川や橋の修景照明、快適な歩行者環境の照明、歴史的施設の照明等により、楽しく余裕のある演出的な光で個性ある都市の夜景をつくり出す。

⑥活動的なナイトライフの育成と環境の整備

都市景観の中にメリハリのある演出を行い、都市生活の活性化を図る。

一般に、街づくりを行っていくとすると、課題や目標の設定は、自分の街をじっくり観察し直すことから始める。具体的には、自分の街を歩いて観察し、資料を収集し現況を認識する。この調査分析段階での方法が街づくりの方向を決定づける。通常は、現況の問題点を抽出し、その解決方法を街づくりの目標とするケース、他方は、街の特性を徹底して抽出、それをさらに磨く方向で街づくりの目標とするケース、ならびにこれら問題点の解決と特性を組み合わせ街づくりの課題とするケースの3つがある。

現況の問題点解決型のケースは、街の機能面の充実や基盤の整備を行うときに導入されやすい。例えば、下水溝の整備や主要道路の街灯設置などがそれである。

次に、特性を抽出して発展させるタイプは、街の個性を重視したり、演出性を充実させるような場合に適している。照明計画であれば、照明基盤の整っている街でこれからどう演出性を高めていくか、といった場合は、この特性発展型が中心になる。

広島市の場合は、人口100万人都市としての基盤整備がある程度進展しているものの、その都市の急激な膨張に基

[†] Lighting space in Hiroshima

* ㈱デザイン総研広島 Hisashi Hanawa

〒730 広島市中央区大手町4-6-16 山陽ビル8F

紹介者 専門会員 中山晴夫

1 大規模雁木の照明

3 標準型雁木の照明

2 ベア雁木の照明

4 水門と雁木の照明

盤整備が追いついていないところがある。特に交通や都心部の機能充足といったアメニティに係わる部分での充実が遅れていると言えるだろう。また一方で広島らしい夜景の創出が期待されているプロジェクトであることから、問題点と特性の両者から街づくりの課題を抽出する方法をとった。

それに際して、照明計画に生かせそうな広島市中心部での特性を以下のように抽出している。

- 東西南北にランドマークとしての山々がある。
- 6つの河川が中心部を流れている。
- 大きな三角洲の中心に、南北の主要幹線道路が走る肋骨状の都市構造をしている。
- 碁盤目状の整然とした都市構造。ただし、斜めに駅前大通りがはしり、独特な都市構造をなす。
- 都市機能のゾーニングが明快に別れている。(官庁街と商業街・飲食街等が分離)
- 平和記念公園や広島城・河川緑地等、中心部に緑のネットワークが形成されている。
- 街の中心を平和大通が東西にはしる。
- 平和大通には左折レーンのある交差点が多い。
- 約500メートル毎に整形の十字型交差点が位置。
- 橋が多く点在。ただし、個性的な橋が少ない。
- 各河川に雁木が多い。ただし、現況は暗い。
- 川の水位の干満の差が激しい。
- 川の分岐部での景観は良い。ただし現況は暗い。

- 川岸緑地が整備されている。
- 記念碑や慰霊碑、燈籠等が市内に散在する。
- 路面電車が今でも営業している。
- 都市領域が狭い。
- 繁華街の中心に公園が点在。
- 平面的なメリハリのない夜景。
- 夜景を眺められる場所が身近にない。
- 早く閉まる繁華街の店舗。
- 城下町
等々。

これらの特性から、いくつかのアイデアが生まれ、計画の柱として定着することになる。

照明計画の姿勢

こうした特性や問題点から、計画の柱を上掲の6つのコンセプトとして整理したが、その際に、基本的な考え方として、点的な照明対象にだけこだわるのではなく、それらの集合体である夜景、ライトスケープづくりを計画の基本姿勢とした。

つまり個々の照明イメージの中から、照明具としての「光のエLEMENT (要素)」を抽出、それら個々の照明具の集積(光のエLEMENT)による空間イメージを形成しながら、「光のシーン」を設定、さらにその集積である「光のスケープストーリー」をつくり出す、といった3段階構成による照明計画に特色がある。また、照明景観としての最

小単位である光エレメントと対象物をいくつか組み合わせた光のシーンの連続や集散を重視したつもりである。

照明イメージを形成しながら、立地する場所や照明対象を整理する中で、光の場面（シーン）イメージをつくり、さらにそれらシーンの集積であるゾーンとしての夜景をつくり出そうとする方法論であった。

都市計画的な視点として夜景のゾーニングや都市骨格を整理しながら徐々にスケールダウンさせていく方法論と、道具の演出として照明具から街のスケールに拡大していく方法論の両者の視点を導入したことにより、ユニークな計画ができたと考えている。

照明計画の概要

まず、最初の計画の目標である「広島顔をつくる」については、駅前や空港・港等の主要交通拠点を広島市の顔として顕在化させるとともに個性的なライトスケープを創出することを狙いとした。具体的には、ターミナル広場等の機能照明に加え、演出性の高い光の群れをイメージしているが、実際には、アジア競技大会開催時の整備を目標とするものの、駅前の再開発や港周辺地区の改造計画とも連係し、長期的な整備になると思われる。

第2の「わかりやすい街をつくる」は、整然とした街区構成が故に通りの特性がつかめないことから、照明による各主要道路の個性化を進展することを狙いとした。すでにいくつかの道路では、整備計画とともに、街路灯の個性化が図られており、それを徹底することが当計画の目的となる。また、主要交差点の顕在化を図るための夜景修景や、主要道路の橋梁の夜間演出で街の目印となるポイントを形成、一種のサイン化を図ることで、街をわかりやすいものにすることが目的となる。主要交差点については、交通の安全性を確保するため、これまで明り状態が保たれていることから、交差点照明の照度アップだけでは効果が上がらない。周辺部の樹木投光等を含めた演出が主要課題となった。また、橋梁の照明は、橋梁自体のかたちや色彩に大いに影響される。広島の橋梁の数は多いが、単純桁で高欄等についても見るべきものが少ないため苦労した。それらの橋の中でも、最近デザイン面を配慮してつくられたものや、かつて昭和初期に原型が作られた橋梁（注：全国的に昭和初期の橋梁はデザインが優れているものが多く、通常は親柱照明を伴っている。）については、積極的に照明整備を行っている。橋梁の照明については、ダイナミックな形態の橋梁が市内には少ないことから、投光型のものよ

り、小さな光源を数多く高欄部に設置し、水への映り込みを狙ったケースの方が効果は高いと思われる。また、機能的にも車や歩行者へのグレアが問題になることもあり、演出・機能両面から、ダイナミックな投光方式に対して、今後はきめの細やかな夜景づくりの方向での検討が必要になると考えている。

その他、広島市内では、現在でも路面電車が主要交通機関のひとつとして活用されていることから、交通系のポイント照明として、広島電鉄の停留所や電車自体を動く照明器具とする観点での照明整備を検討した。具体的には、電鉄側の停留所改造計画で今後は整備されることになる。同様に、アジア競技大会を期に整備中の新交通システムの高架構造物周辺についての照明計画も重要であるが、現在のところは街路灯の整備だけに終わることが予想される。駅舎周辺での修景演出等も含めた整備が望まれるところである。

第3の目標である「シンボルをつくる」については、まず広島市を代表する建造物やランドマーク、イベント等を照明計画で顕在化させることを重視した。これらの多くは昼間時にはシンボルとして認識されているものの、夜間時の存在はほとんど知られていない。また、こうしたシンボル化を充実させていくことにより、昼間とは違ったシンボルの形態や意味性がみえてくることがある。例えば、最初に行った整備として広島城がある。本丸は、かつて照明投光を行っていたものの、オイルショックを機にそれを停止していた。十数年ぶりに投光を再開したわけであるが、照明実験の際、通りかかった市民が、「広島も城下街であったのを思い出した」といった言葉が今も耳に残る。

広島市は、以前から国際平和文化都市をテーマに街づくりを行ってきたが、そうしたアイデンティティを形成していく上で、照明計画の可能性を確認していく作業としても今回の総合計画は意味があったといえる。特に広島市といえば、原爆ドームや平和記念公園を媒体として、「平和」を表現してきた。それらの照明計画には、慎重かつきめ細かな配慮を行ってきたつもりである。実験についても貴重なデータを得ることができた。例えば、平和資料館についての照明は、これまで投光という形で提案、実験がくり返されてきたが、横に細長く、ピロティを介して中に浮かぶ建築物の姿を配慮して検討、縦ルーバー毎に小さな光源を埋め込み、灯明が立ち並ぶ姿をイメージした照明実験は是非とも実現させたいものであった。特に聖地の意味から、平和記念公園における様々な実験では、「祈りの光」をテーマとし、ろうそくの火と同様な自然の光色を大切にしたい。そのため、水銀灯や高圧ナトリウム灯等の使用は避けている。しかし、原爆ドームの演出については、その建物の数奇な運命を表現したい、原爆というものの悲惨さを何とか表現できないものか、といった思いもあって、実験時には、常設系の照明器具の他、舞台用の照明器具も使用した。特に、持論として、何とか一日に一度、数分でよいからストーリー性のある動く回想シーンを演出できないか、

といった願望もあった。具体的には、静かな自然色光源の風景から、原爆時の真っ赤に燃えるドームに変転し、青色光の重い風景を経て、再び自然色に帰る、その間、ドームや焼け残ったレンガ、コンクリート壁部分の光の強弱も伴って、劇的な運命を表現するようイメージしたつもりであった。現在のところでは、種々の平和市民団体への配慮もあって（注：これら一連の照明方法自体が、死者を冒瀆するものとして対応されることもあって）、こうした照明は実践されていないが、今後イベントとして展開できないかとも考えている。少なくとも、常設の照明については現在暗い投光が行われているに過ぎず、一考できないかと思っている。これまで行われてきた国際平和文化をテーマとした街づくりも、すでに戦後四十数年を経て、国際・平和・文化の意味を問い直して新たな「国際平和文化」都市を展開していく必要があると思われる。その上で、こうした一連の照明計画の意味があるのではないだろうか。

都市スケールのランドマークについては、主に東西南北の山々を中心に、方位や広島市の領域・スケールを確認する目印として位置づけている。すでに広島駅北の二葉山では仏舎利塔が整備されているが、今後は東の比治山や黄金山、西の茶臼山や鈴が峰、南の似島といった山々を中心に整備の検討が望まれる。

一方、こうした照明の整備の他、夜景を形成していくためには、素晴らしい夜景を眺められる場が必要である。他市に見られる100万ドルの夜景と言われる都市では、必ずといってよいほどに、身近に夜景を眺められる場所が存在する。例えば神戸であれば六甲山、函館であれば函館山が代表例である。しかし、広島では、近くに山があるものの夜間時に夜景を眺めに行けるような道路や展望の場所が乏しい。展望できる場所も真っ暗な状況であるし、駐車場も狭く、木々が生い茂って、夜景をじっくり眺められる状況にない。やはり夜景を見る場所、見せる場所の整備も重要な課題である。

第4の「親しみのある美しい夜間環境をつくる」についての目標は、街の中で、市民に親しまれる身近な点景をいかにつくり出せるかにかかっている。

その主なものとして公共施設を活用、先導モデルの整備に位置づける、あるいはコミュニティ・シンボルの顕在化として位置づけ整備することを考慮した。

そうした公共施設を誘発材として、民間施設の照明計画に発展・誘導していくことによって、街全体に均整のとれた夜景を形成できることになる。そのために、市が現在推進している優秀建築物表彰制度で表彰された建築物や、公開空地等をもつ施設における照明の理解を推進していくこ

とが第一歩となる。特に空地での街灯設置や演出を主体に展開したいところである。

街に点景をつくっていくには、それらの他、樹木の投光や工作物の投光が主体になるが、市内には、慰霊碑や彫刻等が散在していることから、それらを活用した点景づくりが広島らしい方法のひとつとなる。例えば、文化の表現として、彫刻等を照明することは意味のあることである。実験では平和大通りを中心に検討を行い、これを散策のルートとして位置づけ、都心の回遊性を確保することを目標とした。その結果を利用、地元のアーティストに呼掛け新たに彫刻を約10点ほど仮設展示し、それに照明を設置して回遊実験としたのは、ちょうど一年前のことであった。

第5は、広島らしさを最大限に表現、「光による個性的な風景をつくる」ことを目標とした。

広島市といえば、水の都であり、現在も中心市街を6つの川が流れている。元来、水と光の相性は良く、美しい夜景を伴うところには水の存在がある。例えば、港町横浜や函館の夜景は、水への光の映り込み風景の良さや、陸地における光の平面と水上の影が織りなす陰影の風景、によって形成される。加えて広島市の夜景においては、各河川に今でも残る雁木（船着場）の活用、土手上の街路灯や街路樹投光の点々と続く光の連続が独特の風景をなす。川面を利用した親水空間の表現にとって照明効果は高いと言える。

一方、快適な歩行者環境の形成において、散策ルートの景観の充実やヒューマンスケールの街路灯整備、夜景の美しい場所の抽出とその充実、観光施設の照明整備などもあげられる。中でも、広島城や郷土資料館、旧気象台、日銀広島支店他の歴史的建造物、史跡等の歴史の表現は重要な課題である。

最後に、「活動的なナイトライフとその環境をつくる」〔演出照明〕については、中心地区における夜間生活の活性化のための演出と景観形成を主体に計画した。そのうち商店街等の夜景形成誘導策としてウィンドディスプレイのコンテストを開催、併せてアーティストによるウィンドギャラリイ他いくつかの施策を組合せて年末時の恒例行事として定着しつつある。

また、季節感のある夜景づくりの一環として、光のイベントや季節により変化する景観づくりも併せ行ってきた。5月連休時のフラワーフェスティバルや年末の樹木イルミネーション、訓練船・新日本丸の広島港立ち寄り時の照明等が主なものであるが、最近では、種々のイベントに照明が利用され、新しい広島顔をかきま見ることが多くなってきたのは喜ばしいことである。

（受付1991年11月22日）